

2016年度 センター試験 倫理（本試験） ワンポイント解説

第1問	問1	③ パーソナリティは遺伝と環境の二要因によるので、「遺伝子は、…個人のパーソナリティを決定する」とは言えず、またクローン人間の性格も環境の影響をうけるので、「クローン人間の作成は、ある個人と完全に同じ性格の個人をもう一人作り出す」とも言えない。
	問2	ア ルソーは青年期を「第二の誕生」と呼んだ。イ 新島襄は、帰国後にキリスト教に基づいて同志社大学を創立した。ウ 井上哲次郎は、ドイツ観念論を紹介し、東西思想の統一を試み、教育勅語を背景にキリスト教を反国家的であるとして批判した。
	問3	①は代償であり、②合理化であり、③は抑圧である。
	問4	①「元来、課税前所得のすべては政府のもの」と、③「所得は、すべての国民に対して均等に分配されなければならない」という内容の記述は、資料文にはない。④「どのような租税システムが公正であるかは、市場での経済上の取引の結果によってしか決まらない」とあり、それは市場での取引の結果として租税システムの公正さが決定されるという意味である。資料文では「そうしたシステム(公正な租税システムをいう)を背景とする限り、…所得に対して、人々が適法的な権利を有している」とあって、それは租税システムが適正であれば市場取引が正当化されるという意味であり、資料文と選択肢の内容が異なる。
	問5	①「身分・家柄・親の地位」と「個人の才能」の割合の合計は、英国とスウェーデンでは、「個人の努力」の割合よりも大きい。③ 社会で成功する最も重要な要因が努力であり、昇給・昇進を決める最も望ましい方法が成績であるとしても、努力をすれば成績が上がるとは必ずしも言えず、したがって、「努力の度合いが昇給・昇進に直結すべきだと考える傾向が高いと言える」ということにはならない。④ 日本では、成績を重視する割合は44.6%であり、勤務年数を重視すべきと考える割合の37.1%よりも高い。
	問6	アフーマティブ・アクションは、歴史的に差別されてきた集団に対して、差別を解消すべく、雇用や教育を保障する優遇政策であり、ジェンダーの差異の積極的な承認に向けたもの(①)、結婚の機会を保障する措置(②)、根絶不可能な構造的差別を不断に是正するための恒久的措置(③)ではない。
	問7	ア ハンス・ヨナスは『責任という原理』において、現在世代は未来世代の存続に対して一方的に責任を負うと主張して、世代間倫理につながる考え方を提示した。イ ラッセルは、アインシュタインらとともにラッセル＝アインシュタイン宣言を発表し、国際紛争に対する平和的解決の手段の発見や、核兵器廃絶などを説き、のちのパグウォッシュ会議が開かれるきっかけとなった。ウ シュヴァイツァーは、アフリカのランバネレで医療と伝道に従事し、生命あるものすべての生きようとする意志を敬うという生命への畏敬の念を説いた。
	問8	① 高齢者介護や子育て支援のためのサービス充実の必要性は、減少してはいない。② ボランティア元年とは、1995年の阪神淡路大震災の時に、多くの市民がボランティアとして参加した年をいう。③ インドで孤児や病人に対する救済活動に生涯を捧げたのは、マザー＝テレサである。
	問9	コミュニタリアニズムとは、共同体の意義を再評価し、個人の自己実現は歴史的に形成された共同体の伝統内部において可能となるという考え方である。それは自由主義的思想に反対し、個人が好きなように人生を選択できるという人間像を「負荷なき自我」と呼んで批判し、道徳的観念は共同体の共通善による、と主張する。

第2問	問10	ア Aは第4発言で、家庭環境が恵まれないとしても不公平と思えない、としている。イ Aは第4発言で、家庭環境が恵まれていないのは気の毒であるにしても、それは不公平であるとは思えず、お金持ちから税金として多くを取る理由にはならない、と主張している。Bは第3で、家庭環境のせいで不利であるのは不公平で本人に落ち度はないとして、第1発言で、恵まれない者に対する制度的救済を主張している。ウ Aは第5発言で、不運な人に対してはボランティア活動による救済を訴えるのに対して、Bは第3発言で、不遇な者がいるのは不公平であり、第4発言では、そのような人を救うのは国であると考えている。
	問1	孔子によれば、内面的な仁が外面的に現れ出たものが礼であり、そのように完成した人間を君子である、とされる。
	問2	シャリーアはクルアーンに基づくイスラム法であり、礼拝・断食などの儀礼的規範と婚姻・相続などの法的規範に大別される。一般に、食生活に制限があり、酒を飲むことや豚肉を食べることは禁じられる。五行とは、イスラムにおける五つの信仰行為であり、信仰告白・礼拝・喜捨・断食・巡礼を指し、瞑想は含まれない。
	問3	ソクラテスは「悪法も法なり」と主張し、脱獄は国家に対する不正であり、不正は悪であるので、不当判決であってもそれには従わなければならないと説いた。国家社会契約による(①)とは考えておらず、人々に正しいと思われるのが正義であるとも述べておらず(③)、国家に配慮して生きるのが幸福である(④)とも主張していない。
	問4	① 無自性とは、すべて存在するものには固定的実体がないという考えである。② 四苦とは、生・老・病・死をいうのであって、死とは「死を目の当たりにすること」を言うのではない。③ 貪り・怒り・愚かさは「三毒」といわれる。
	問5	資料文には「たとえ国民が有害な規則を受け入れたとしても、それは法律の名には値しない」とあり、ソクラテスのような「悪法も法である」という考え方の正反対の主張となっている。ストア派によれば、本来の法律とは「正邪の区別」であり、「万物の根源であるあの太古以来の自然というものの表現」でもあり、「人の世の法律は、この自然を範として定められた」と主張している。したがって、善人の総意による自然の管理(①)ではなく、善人と悪人を公正に裁くことができない(③)ということもなく、また自然に従うだけでなく、豊富な知識に基づくべきである(④)とも主張されていない。
	問6	③ イスラエル人は、モーセに率いられてエジプトから脱出しており、その途中のシナイ山においてモーセは神から十戒を授けられている。「エジプトに移り住む際の心構えとして神から与えられた律法」という箇所が不適切。
	問7	② イエスは、律法を精神を理解するように説いており、律法の形式的遵守を主張する立場を批判した。③ イエスは、当時の敵を憎めという教えを批判して、「敵を愛せよ」と説いた。④ イエスは、安息日を形式的にのみ守る態度を批判した。
	問8	① アリストテレスは、万物の根源にあるものを形相(エイダス)と呼んだ。② ムハンマドにとってアッラーは太陽神ではなく、また偶像崇拜は禁止される。③ 絶対者と個人の本质が同一であると考えたのは、ウパニシャッド哲学である。
	問9	ア 第2段落では、「礼を通じて人間の性質を人為的に矯正し、社会の秩序を構築すべき」とあり、選択肢の「人間の邪な性質を矯正するために社会の構築が必要」と一致しないので不適切。イ 第3段落では、仏教では戒めによって安らぎの境地に至り、ストア派では宇宙を貫く理法に従って自律が達成される、と主張されている。ウ 第3段落では、ユダヤ教が律法の順守を説くのに対して、イエスは特に愛の掟が重要であると主張している、と記されている。

第3問	問1	① 罪とは共同体の秩序を乱す行為であり、祓いとは罪に対応する代償物を出すことである。スサノワの畔を壊し汚物をまき散らす行為は罪に相当し、多くの物品を献じることは祓いにあたる。
	問2	① 神聖にして侵すことのできない神であり、忠孝に基づいて奉仕する対象としての天皇という考え方は、明治憲法や教育勅語のものである。② 先祖は死後は近くの山などに留まって子孫を見守るという考え方は、日本人の素朴な信仰であり、柳田国男によって研究された。③ 共同体の外部から来訪する神という信仰は、折口信夫によって考えられたものであり、マレビトと名づけられた。
	問3	『金光明経』は、鎮護国家のための経典として知られ、奈良時代の日本に影響を与えた。鑑真は、渡来して東大寺に戒壇を建て、聖武天皇以下に授戒した。空也は、平安中期の僧で、念仏を唱えつつ諸国をめぐり、道路・灌漑など社会事業を行い、無縁の死骸を火葬した。
	問4	③ 親鸞の絶対他力によると、念仏すら自力ではなくて仏の慈悲がそうさせるのであって、完全に阿弥陀仏の本願による、とされる。
	問5	藤原惺窩をはじめとして、儒教は人倫を尊重する立場から、しばしば仏教の出家主義を批判している。資料文はその一例である。「捨つるとならば、第一に身の楽を思ふ心をも捨て」「名教中に自然の楽地あるべし」とあり、それが①「自分の楽を思ふ心をまず先に捨て」「聖人の教えに適った安楽の境地が開ける」に相当する。
	問6	③ 本居宣長は、人間の自然なる情の発露を肯定し、「嬉しかるべきことは嬉しく、悲しかるべきことは悲しく」と主張し、不自然にそれを否定するような、厳格で理屈っぽい儒教と仏教を「漢心」と呼んで非難した。
	問7	① 『三太郎の日記』を著したのは、個人主義的理想主義を説いた阿部次郎である。② 戦後の混乱期に坂口安吾は『墮落論』を発表し、人間は戦争に負けたから墮落するのではない、人間だから、生きているから墮落するのである、と「墮ちきる」ことを主張した。③ 『様々なる意匠』によって近代批評を確立したのは小林秀雄である。
	問8	純粋経験とは、反省・分析を含まない、主客未分の具体的直接的経験をいい、優れた音楽に聞き入っていたり、描くことに没入しているような経験を指す。音程のずれに気づいたり、自分に無垢な頃があったと回想しているのは、反省的分析的になっていて、純粋経験とは異なる。
	問9	② 第3段落では、仏教の教えとして「人の求める喜びは、いずれ苦に転じるものであり、仏の道に従ってこそ確かな喜びが得られる」ということであり、それは「仏によって苦しみが与えられる」ということではない。
第4問	問1	① ボッカチオの主著は『デカメロン』である。
	問2	① 精密な天体観測データによって惑星の楕円運動を見出したのはケプラーである。② 地上の物体と天体の運動が同一の法則に従うとして、万有引力を唱えたのはニュートンである。③ 夢幻的宇宙論を唱えて火刑に処せられたのはブルーノである。
	問3	② 近代以降、理性が自然と社会を支配する道具へと墮したものを、フランクフルト学派のホルクハイマーやアドルノは道具的理性と呼んだ。③ 機能的な政治的経済的合理性が、対話的理性に基づくコミュニケーションを本質とする公共社会の領域を侵食する現象を、ハーバーマスは生活世界の植民地化と名づけた。④ 自己実現を本質とする労働が、資本主義社会においては人間を非人間化しているとして、マルクスはその状況を労働の疎外として批判した。

問 4	<p>① カント哲学によれば、時間と空間は感性的直観の先天的形式であって悟性ではない。③ 人間が認識の対象とできるのは現象のみであって、物自体は人間には認識されない。④ 理論理性では、魂・世界・神・自由などは認識できないのであるが、実践理性によってそれらのものは善を実現するための条件として要請される。</p>
問 5	<p>ア 『人知原理論』を著したイギリス経験論哲学者のバークリーは、「存在するとは知覚されることである」と主張して、知覚を離れては物は存在しないと説いた。イ イギリスの経験論の哲学者ロックは、主著『人間知性論』において、すべて知識は感覚的経験に由来するとして生得観念を否定し、心を白紙にたとえた。ウ イギリスの哲学者ヒュームは、原因と結果の結びつきは習慣的連想から生じる主観的信念に過ぎないとする哲学的懐疑論を説いた。のちにカントがヒュームの思想の影響を受けて、独自の思想を展開することになる。</p>
問 6	<p>最後の審判のようなキリスト教的歴史観を否定し、ニーチェは一切は意味も目的もなく永遠に繰り返すだけであるとして永劫回帰の思想を唱えた。その中であって運命を肯定的に受け入れる態度が運命愛であり、常に自己を乗り越えようとする根源的意志が力への意志である。</p>
問 7	<p>資料文によれば、心的状態は絶えず膨張し、私たちの人格も絶えず成長する。人格には絶えず何かが付加えられて新しくなり、かつ予見されないものとなるので、生の一瞬一瞬は創造である。過去が刻々と変化する(①)のではなくて、現在の人格が刻々と変化する。この創造は予見できないので、未来を見通す(②)ことはできない。また現在に何かが付加されるのであって、手持ちの過去を適宜活用する(④)のでもない。</p>
問 8	<p>現存在(ダーザイン)、被投性、世界内存在などはハイデガー用語としてなじみ深いが、即自存在と対自存在はサルトルの用語であって、ハイデガーとは無関係である。</p>
問 9	<p>ここでは、第 3 段落に「科学的な考え方で人間の生を隈なく照らし出すことは難しい」とあるように、科学の限界に触れており、したがって、「予測を踏まえ統御することを可能にした」(①)や、「科学に基礎を求めべきだ」(②)という選択肢は不適當である。また、時間を惜しんで効率的に生きる(③)という記述は、本文にはない。</p>